

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530215

研究課題名(和文)ピグーの道德哲学の構造と厚生経済思想

研究課題名(英文)The Structure of Pigou's Ethical Thought and Welfare Economics

研究代表者

山崎 聡 (YAMAZAKI, SATOSHI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：80323905

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：通説とは異なり、ピグーは、ムアやラッシュダールと同様の理想的(非快楽主義的)功利主義者である。そして、道德哲学を経済学に応用する際に、彼は二つの規準を導入している。欲求充足と必要充足である。必要充足は「ナショナル・ミニマム」論に具体化されている。かつ必要充足としてのミニマムは社会的に優先されるものと彼は位置づけている。この必要充足によってもたらされる帰結は、経済的厚生(効用)と一致するとは限らず、彼によれば、部分的に卓越性を含んだ非経済的厚生である。

研究成果の概要(英文)：In contrast to conventional understandings, Pigou can be regarded as an ideal (non-hedonistic) utilitarian, a position represented by Moore and Rashdall. And, regarding the application of his ethics to welfare economics, Pigou introduces two major criteria: desires satisfaction and need satisfaction. The need concept has been embodied in the argument of the national minimum, and the minimum as need satisfaction is socially prioritized in his vision. It can be justified in terms of the interpretation of the indirect strategy of his utilitarianism. Those parts of welfare which are brought about through satisfaction of needs (the national minimum) do not necessarily coincide with economic welfare. Therefore, in Pigou's notion, the national minimum is supposed to promote directly some parts of non-economic welfare which include an element like excellence.

研究分野：経済思想

キーワード：厚生経済学 功利主義 福祉 正義 必要 最低水準

1. 研究開始当初の背景

ピグーは、厚生経済学の創始者であり、その大家である。だが、我が国におけるピグー研究の重鎮である千種義人氏がいうように、著名であることに反して、その体系的な研究は国内外においても驚くほど少ない。なおかつ、これまではケインズ(研究)側から眺められ、バイアスがかかった評価を受けるなど、ピグーの真意が正確に汲み取られてこなかったといえる。ピグー研究の相対的な遅れはこのように著しく、これは大きな学問的損失である。しかしながら、このような状況に対し、近年、N. Aslanbeigui 氏、S. Medema 氏、本郷亮氏などによる(主に経済理論的側面における)ピグー再評価の研究も現れつつある。例えば、ケインズのオリジナルだと考えられてきた幾つかの要素(有効需要を含めた雇用理論や乗数理論など)に関して、実はピグーの内にそれらの萌芽があったことなども検証されている。雇用理論や財政論の再検討を通じて、ケインズ革命の陰に埋もれてしまった先駆性を論証しようとして試みられている。

これに対し、道徳哲学の側面に関する研究の遅れはもっと顕著である。経済理論の側面に関して再評価は幾らかなされているが、道徳の側面は殆ど手付かずの状態であった。厚生経済学の創始者といわれるが、元々は、神学、倫理学、哲学方面がピグーの関心分野であったにもかかわらず、である。そこで私はこれまでの研究において、ピグーの道徳哲学の側面を正面から扱ってきた(これまでの到達点は、拙著『ピグーの倫理思想と厚生経済学』昭和堂、2011年、である)。彼の学究プロセスが示しているように、彼は最初に道徳や価値の問題を考え、それを実現する手段としての経済理論を構築したのである。そこで、私は、初期に書かれたピグーの倫理学的文献に当たって、彼が元々抱いていた道徳哲学を再検討した。その結果、彼の哲学は、多元的な善・厚生を追求する(ムアと同様の)理想的功利主義であることが分かった。私のこの所見は、経済学的文献だけを基にピグーをベンサム型またはシジウィック型の快樂主義的功利主義と見なす従来の研究(エッジワース、ハチスン、オドンネルなどによる研究)に対して大きく修正を迫るものとなった。

続いて私は、ピグーの著作全体に当たりながら、彼の多元的な善(厚生)の具体的な要素を明らかにした。一部を挙げれば次のとおりである。「倫理的人格(ethical personalities)、快樂(pleasure)、善意思(good will)、徳(virtue)、愛情(love)、率直(open-hearted)、誠実(sincere)、非利己性(unselfish)」など。その結果、快樂や経済的厚生(満足・効用)などは、ピグーの厚生のほんの一部分に過ぎないことが明瞭にされた。多元的な善を追求する理想的功利主義であるという視点を確立することによって、経済的厚生以外の要素(倫理的人格や卓

越性といった非経済的厚生)の積極的な解明と経済理論との関係を再検証するというピグーに関する新しい研究側面が開かれたのである。

さらに、ピグーの道徳哲学は、理想的功利主義であるが、社会的厚生を最大化するという抽象的(究極)原理に加え、それを実現する応用のための下位(二次)原理とから構成されている重層的な構造を有していることを私は指摘した(この観点は、ベンサムやミルに対しても援用されているもので、J. Riley 氏、平尾透氏、音無通宏氏らの研究がある)。この観点からピグーを分析し、従来のピグー研究では見落とされてきた多くの要素(卓越、権利、正義、必要など)を拾い上げることを通じて、彼の道徳哲学の全体像に迫った。

つまりは、ピグーの道徳哲学の全体像を踏まえ、経済理論的側面を考えても、彼の厚生経済の思想を十分に理解することはできないのである。何故なら、これまでのようなピグー観(厚生=主観的満足)では、膨大な著作に散りばめられている彼の多様な厚生経済の思想を汲み取ることができないからである。それを可能にするのが、拙著で説かれたピグー道徳哲学の重層的な理解という観点である。

2. 研究の目的

本研究は、アーサー・セシル・ピグーが構想した倫理・道徳哲学の内在的な研究およびその厚生経済学との関連の考察を目的としている。ピグーの道徳哲学の実質的な内容を本格的に研究したものはこれまでのところ殆ど皆無であったが、拙著(『ピグーの倫理思想と厚生経済学』昭和堂、2011年)はこの点を正面から扱い、ピグーにおいても確固とした倫理学的知見の基盤があることを主張した。同著で説かれたピグー道徳哲学の重層的な理解という観点から、本研究では分析をさらに推し進め、従来のピグー研究では明らかにされてこなかった重要な観念(必要充足原理とそれに基づく分配規準)を浮き彫りにする。そのことを通じて、ピグーの厚生・福祉思想を再検証し、彼の厚生経済学が本来持っていた思想的豊穡性を描き出す。

ピグーの厚生経済の思想に対しては、様々な見方が同時代人たちからも、その後の研究者たちからもなされているが、それらの中には、皮相的な理解のためか、ピグーの真意を歪んで捉えているものも少なくない。本研究は、拙研究で取った観点(上記)とピグーの原典に基づき、代表的な批判的論点に対して詳細な再検討を施し、ピグーを再評価する契機を提供する。

3. 研究の方法

研究の方法としては、通常の経済思想の研究手法に則る。つまり、原典による引証および再構成である。解釈の主体が変われば、ピ

グーの思想が新たに構成される可能性が生まれてくることから、ピグーの業績に広く当たり、彼のテキストに対して別の光を当て、新たな解釈を提出する。本研究では、ピグーの再構成に当たって、彼が提出しながらもさして注目されることのなかった様々な材料を活用していく。公刊された論文や著書の叙述のみならず、未公開の書簡、草稿、メモというようなものも必要に応じて参照する。また、研究領域が関連する研究者たちと情報や意見を積極的に交換しながら、有益な知見を得ることに努める。そして、研究がある程度進んだ段階で、ワークショップや学会報告の機会を設け、内容の反省と研鑽を重ねていく。そうした過程を経て、学術論文として完成させ、学術誌に投稿する。

経済学史および経済思想研究の方法は、研究対象とする人物の理論や言説を単に紹介したり、列挙したりすることではない。例えば、塩野谷祐一氏は次のように述べている。「優れた学史研究の要件は、何らかの視点から素材〔理論や思想〕の系列について意識的に論理的あるいは歴史的再構成を行うこと」であり、その「成功の条件は、視点の卓抜性と再構成の独創性にある。そうでないものは、単に個々の学者の理論を並べ、その内容を平均的な知識のレベルで要約しているにすぎない」(『哲学なき経済学史研究を超えて』『経済学史学会年報』、2000年)。本研究の方法は、このノルムに則っている。つまり、ピグーの厚生経済思想の研究方法にとって肝要なことは、「何らかの視点から素材の系列について意識的に論理的あるいは歴史的再構成を行うこと」となる。

本研究において、「素材」とは当然ピグーが著した諸文献であるが、「何らかの視点」として、(拙著でも用いた)ピグーの道德哲学の多面的・重層的な理解という観点をを用いる。ピグーの道德哲学は、これまでの拙研究で明らかにしたように、理想的功利主義であるが、社会的厚生を最大化するという抽象的(究極)原理に加え、それを実現する応用のための下位(二次)原理とから構成されている重層的な構造を持っていると理解された。この観点からピグーを分析し、再構成する本研究の方法の意義は、従来のピグー観では見落とされてきた多くの要素を拾い上げることができ、しかも、それらをピグーの厚生経済思想の全体像として再構成できることに存する。特に、研究目的でも書いたピグーにおける必要充足の観念とそれに基づく分配規準に関しては、本研究のこの観点からの再構成によって、適切な位置づけと解釈が与えられるものと考えられる。

4. 研究成果

(1) 厚生主義批判の再検討：ピグーの経済学の究極目的たる厚生(福祉)とは、簡潔に言えば、「人間の精神生活」の充実と陶冶である。それは多数の要素から成る複合体であ

る。このような広汎な厚生全体を目指すことは実践上困難であるので、ピグーは、経済活動によって直接影響を受ける満足意識に対象を限定し、これを「経済的厚生」と定義した。こうして、彼の厚生経済学の理論体系は、厚生の一部である経済的厚生の増減を基準に構成されるに至った。この点に対し、少なからぬ批判が(例えば、ホブソン、ホートレー、ヒックス、福田徳三らによって)浴びせられてきた。批判の要点は、満足という一部を偏重することによる他の厚生の部分(道徳性や審美性など)の軽視、また、満足の質を問わず、その量だけが考慮されているというものである。本研究はこうした諸批判について再検討した。結果、ピグーの経済的厚生は、彼の元々想定していた厚生全体の本の一要素に過ぎず、それ以外の非経済的厚生の多元性と豊穡性が従来の研究では全く軽視されてきたことを明瞭にした。彼の広義の厚生経済思想においては、むしろ人間性の陶冶といった非経済的厚生の増進こそが最重要視されていることを突き止めた。

(2) 総和主義批判の再検討：別の大きな論点としては、ピグー厚生経済学では、主観的満足(経済的厚生)の社会総計量(総和)が社会選択の判断基準とされるため、()分配的正義が考慮されない、()主観的満足であることから客観的な境遇が反映されない、という批判がある。これもピグー批判としては定番のものである。これに対して、本研究は、ピグーが経済的厚生(と限界効用逓減)に基づく原理以外の分配原理をも採用していたことを明らかにした。それは、端的に言えば、「必要充足」に基づく分配原理である。この点は、これまでのピグー研究においては全くといえるほど掘り下げられていない。よって、この論点をさらに広げて、ピグー理解の新しい側面を追求した。また、主観的欲求充足である経済的厚生とは異なり、必要充足は、ピグーによれば「客観的」なものであり、個人の境遇を客観的な見地から評価する原理である。これが彼の「ナショナル・ミニマム」論に体现されていることを明らかにし、上記の典型的なピグー理解に修正が必要であることを示した。

(3) 本研究の学術的な特色・独創性・意義：従来のピグー評価は、主として彼の主著『富と厚生』および『厚生経済学』に基づいているものが多く、彼の著作全体が含意する意図を十分に捉えていない。このことはピグー研究にとって何を意味しているのだろうか。そうした主著のみを基にピグーを論じて、彼が元々抱いていた思想のほんの一部しか捉えられないことになる恐れがある。従来のピグー理解の多くがこのような性格のものであると思われる。そうした主著のみに縛られることなく、もっと多くの著述の中にピグーが残した叙述に頼って彼の厚生経済思想を再構成し、こうした作業によって、従来の通説的なピグー評価に対して一定の修

正を施す、というのが本研究の最大の成果である。経済思想研究者西沢保氏の言葉を借りれば、「パレートの基準で濾過されたことによって失われたピグーの厚生経済学の要素、ピグー自身が厚生経済学を体系化するなかで脚注に落としたものを再検証し、ピグー『厚生経済学』の全体像、さらには創設期の厚生経済学の多様な実態を...再検証する必要がある」(『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店、2007年)ことに対して、本研究はまさにそれを遂行したものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

山崎聡 “Utilitarianism and Eugenics: Aspects of Pigou’s Welfare Economics”, ISUS XIII 第 13 回国際功利主義学会、2014 年 8 月 20 - 22 日、於横浜国立大学(査読付プロシーディング、pp.1-21)(Web 媒体)。

山崎聡 「創設期の厚生経済学の一側面 ピグーと優生思想」『経済研究』第 65 巻第 2 号、pp.126 - 139、2014 年(査読付)。

山崎聡 「プレタナーノ調査と優生学」『高知大学教育学部研究報告』第 74 号、pp.123 - 129、2014 年(査読無)。

山崎聡 「ピグーの厚生経済学と論争点に関する考察」『高知大学学術研究報告』第 62 巻、pp.49 - 61、2013 年(査読無)。

山崎聡 “The Development of Welfare Economics: Orthodox History after Pigou, and Recent Studies”, 『中央大学経済研究所年報』第 44 号、pp.135-148、2013 年(査読無)。

山崎聡 “Need and Distribution in Pigou’s Economic Thinking. The International Society for Utilitarian Studies”, ISUS XII 国際功利主義学会第 12 回大会、2012 年 8 月 9 - 11 日、ニューヨーク(査読付プロシーディング、pp.1-24)(Web 媒体)。

[学会発表](計 9件)

山崎聡 An Aspect of Welfare Economics in the Formative Age: Pigou and Eugenics, International Workshop Grants-in-Aid for Scientific Research (A):代表西沢保(帝京大学)於一橋大学(東京都国立市)2015 年 3 月 20 日。

山崎聡 「ケンブリッジ学派と優生学：マーシャル・ピグー・ケインズ」研究集会「経済学と功利主義」(有江大介氏(横浜国立大学)主催)於横浜国立大学(横浜市)2015 年 3 月 7 日。

山崎聡 「ケンブリッジ学派と優生学」ケインズ学会第 4 回年次大会 於立教大学(東京都)2014 年 11 月 29 日。

山崎聡 Utilitarianism and Eugenics: Aspects of Pigou’s Welfare Economics, ISUSXIII 第 13 回国際功利主義学会 於横浜国立大学(横浜市)2014 年 8 月 20-22 日。

山崎聡 「ピグーの厚生経済学と論争点に関する考察」研究会：「現代福祉国家の背景理論と経済思想」於一橋大学経済研究所(東京都)2014 年 8 月 4 日。

山崎聡 「創設期の厚生経済学の一側面 - ピグーと優生思想 - 」一橋大学経済研究所定例研究会 於一橋大学経済研究所(東京都)2013 年 11 月 20 日。

山崎聡 「ピグーのマニフェストから見た狭義と広義の厚生経済思想」科研費「功利主義と公共性：経済は人々を幸福にするか？」による第 5 回研究集会(有江大介氏(横浜国立大学)主催)於慶応大学三田校舎(東京都)2012 年 12 月 15 日。

山崎聡 Need and Distribution in Pigou’s Economic Thinking」The International Society for Utilitarian Studies, ISUS XII 国際功利主義学会第 12 回大会 於ニューヨーク大学(ニューヨーク)2012 年 8 月 9-11 日。

山崎聡 「ピグーの経済思想における必要と分配」経済学史学会第 76 回大会 於小樽商科大学(北海道)2012 年 5 月 26-27 日。

[図書](計 1件)

山崎聡 「ピグーの道徳哲学と厚生経済学」(第 4 章)西沢保・小峯敦編『創設期の厚生経済学と福祉国家』ミネルヴァ書房、pp.113-137、2013 年。

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 聡 (YAMAZAKI, SATOSHI)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授
研究者番号：80323905

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：